

# クラーク室内管弦楽団

## 第47回 演奏会



## あたらしい季節によせて

2019年4月19日(金) 19:15 開演

北海道大学クラーク会館 講堂

入場無料

～・～・～・～・～・～・～

プログラム

M. ラヴェル (1875-1937)

組曲『クープランの墓』

F. メンデルスゾーン (1809-1847)

交響曲第 **1** 番 ハ短調 op. 11 MWV.N 13

指揮：奥 聡 (メディア・コミュニケーション研究院)

---

お問い合わせ 011-706-2493 (農学研究院 曾根輝雄)

## プログラムノート

西洋音楽において、音階（旋律）、和声、そしてテンポ（リズム）が重要な構成要素であると考えられています。そして、国や時代によってもその特徴は大きく異なり、同じ「西洋クラシック音楽」と言っても、たとえばバッハに特徴的な旋律・和声・リズムとラベルに特徴的なそれとでは、その個性は大きく異なるように思います。世界にはリズムやテンポだけが主要な要素の音楽を伝統的に持っている国や地域もあるでしょうし、歌（旋律）だけが音楽的特徴の伝統であるところもあるでしょう。日本の伝統的な音楽も、いわゆる西洋音楽的なテンポ感とは随分と異なるように思います。大相撲で聞こえてくる小太鼓の「ト〜ン、ト〜ン、トン、トン、トン、ト、ト、ト、トトトトト…」というリズムは、日本人にとっては全く自然なリズム感ですが、西洋人にとっては演奏するのはとても難しいそうです。一方、ウィннаワルツの3拍子のリズムは（決して機械的な3拍ではない！）、ウィーン子にとっては空気のように自然な感覚のようですが、日本人には西洋音楽の勉強を本格的にした人にとってもなかなか難しいようです。かつて小澤征爾がウィーンフィルのニューイヤーコンサートを振ったときに、猛勉強をして、ウィーン風3拍子ワルツのテンポ感を細かく振ろうとした小澤に対して、ウィーンフィルのある楽員が「セイジ、そんなに細かく振らなくても、それはこっちでやるから」と言ったとか。世界中のオーケストラも国際化が進み、多くは多国籍軍となっているようです。地域的な特色というのは今後どのようになっていくのでしょうか。

メンデルスゾーンは裕福な家庭に育った早熟の天才で、この『交響曲第1番ハ短調』も、15歳の時の作品で、まだ若書きの部分もありますが、その後の名曲の片鱗を随所に見せている作品です。さて、『ハ短調』。西洋クラシックの多くの作品で、その調性が明記された書き方が一般的になっています。現在、カラオケなどでは、歌手の音域に合わせて、簡単に調を上げたり下げたりできるので、調性に対する感覚は現代人はおおらかになっているかもしれませんが、西洋古典音楽では、それぞれの調に特徴・個性があると考えられています。これは弦楽器の調弦が固定されるようになったこととも関係があるかもしれません。解放弦をたくさん使える調とそうでない調では、弾きやすさだけでなく楽器としての響きにも大きく影響します。フラットが3つついたハ短調は、やや重めの暗い響きでしょうか。第1楽章、第3楽章、第4楽章がこの調で統一されています。一方、第2楽章はハ短調の平行長調である変ホ長調で、同じフラット3つですが、大変明るい軽やかな響きとなります。こうした調性による色合いの変化も西洋音楽の面白さの1つと言えるでしょう。

メンデルスゾーンのこの作品から93年後の1917年、ラベルのピアノ組曲『クーブランの墓』が作曲されました。日本語で「墓」というとお盆や墓石を連想するかもしれませんが、西洋言語（フランス語で *tombeau*、英語で *tomb*）では、その人の思い出や功績を追悼するという意味も持つ単語のようです。ラベルのこの曲は、第一次世界大戦で戦死した友人たちの思い出にささげられていると考えられています。ラベルの最後のピアノ独奏曲（6曲からなる）ですが、その後、1919年にラベル自身がそのうちの4曲を用いて、オーケストラ組曲に編曲しています。1曲目はホ短調の「プレリュード」。旋律というより細かな音の動きの連なりと拍の頭で演奏される装飾音符が、曲の流れを推し進めていく印象的な楽曲です。2曲目は「フォルラヌ」（北イタリアの古典舞曲の1つ）で、ちょっと物憂げな気分のするアレグレットの踊りの音楽です。3曲目の「メヌエット」も優美な3拍子の踊りで、ト長調の明るい響きが心地よい音楽です。終曲「リゴドン」は、ハ長調の生き生きとした2拍子の音楽でフランスの田舎に伝わる古典的な踊りの音楽をイメージしているそうです。もともとピアノ独奏曲として書かれたものであるため、オーケストラとしては大変難しい部分も少なくありません。音階も和声もリズムもドイツ音楽とは大きく異なるフランス的な響きを感じていただけるのでしょうか。

世界中のオーケストラで国際化が進んでいると述べましたが、極東の島国の北の端でも、アマチュアの小オーケストラがラベルやメンデルスゾーンを演奏会でとり上げています（このオケのことです。全員日本人です）。さて、どのような響きになるのでしょうか。4月になり、いつも期待と不安が入り混じる新年度の初めですが、快いひと時をお過ごしいただければ幸いです。（メディア・コミュニケーション研究院 奥 聡）